74 新破天荒

令和四年度より
創刊
第 3 4 号

卒業おめでとう

七十四回生の皆さんへ。とうとうこの日を迎えることとなりました。皆さんにとって姫路南高等学校での三年間はどんな三年間となりましたか。

今感じている三年間は、直感的な振り返りになるとおもいます。

今日家に帰って一人になった折りに、自分が次のステージを旅立つとき、あるいはあなた自身が保護者となって我が子が選んだ高等学校に出向いたときに、自分このの三年間をどう感じるのかを少しだけ感じる時間を持って下さい。そして、保護者に一言

「・・・」

皆さんが表裏なく感じた一言を、伝えてもらえることを期待します。

私にとって、この三年間は教員生活でも史上最強にいろんなギャップを感じ続けた三年間でした。

生徒との年齢差によるギャップも大きかったかもしれません。リモート時代の中、報告・連絡・相談と言う言葉もなかなか成立せず、この先自分の生き方をどうしていくべきかを考え続ける毎日でした。

「筋を通せば道理が引っ込む」という言葉も以前はありましたが、今や「何が筋で、何が道理なのか」が、私以上に卒業生の皆さんが立つことになるこの先の社会では、道に迷う、あるいは、道を変える機会が増えるかもしれませんね。

ただ、道は「ある程度歩いてこそ」です。自分が進もうと「決めた」道を変えることに、抵抗がない時代とはいえ、「進んだ」道を見てから、道を「変える」判断はしてほしいと思います。

とは言え、姫路南高等学校の関係者を含め数多くの私に関わって下さった皆様のお陰で、今日という日を迎えることができました。本当に有難うございました。

♫

悩み続けた日々が　まるで嘘のように
忘れられる時が　来るまで
心を閉じたまま
暮らしていこう　遠くで汽笛を聞きながら
何もいいことが　なかったこの街で

♫

七十四回生の皆さんは「誇り」と「自信」、そして「責任」を大切にして、自分の道を歩んで下さい。

今日の日は過ぎましたが、一昨日に前期の勝負を終えた人達は、今日少しだけ三年間の感傷に浸って再び、次の勝負とともに「より良き結果」の到着を待ちたいものです。

これからが勝負

昨今ますます、「高等学校卒業式時には進路が確定しているもの」との誤解を生じるような教育政策が煽られているように思えてなりません。

もともと、社会は「より速い次の進路の確定」を急がせる風潮です。特に、保護者も「無理をせずに早く決まるところで」という傾向が一般的のように感じさせられています。

「成人年齢は十八歳にしよう、選挙権も与えよう」という一方で、社会では、高校までだけでなくそれ以降も、大学などでは保護者を含めた面談や、就職活動においても保護者の干渉などが多くなっていることが、大学で勤務している友人達からは「ため息」いや「嘆き」、「この先の日本社会への憂い」とともに伝えられて、そして、「頼むぞ、初等、高等学校の教育」や「頑張れ！高校教師」の号令が、我々からすれば無責任に投げ掛けられます。

矛盾に満ちた現代のタイムマネージメントの中で、皆さんはいよいよ四月からの社会で「一人前の大人」扱いをされていく。そして、数多くの生徒の皆さんが、ほぼ「形のうえ」では「成功体験者」として、「根拠のない自信」を持って社会へと旅立ちます。

こんな心配は、人生の「年齢のうえ」での先輩の杞憂に終わればよいと思ってはいます。

自分自身でバランスをとりながら進む機会が多くなると思いますが、「年寄りの杞憂」が「杞憂」だけで終わるように、自らの人生を力強く歩んでほしいものです。

とは言えが多いですが

ただ、卒業式は高校生活との「縁の切れ目」ではありません。もちろん三月三十一日までは、皆さん姫路南高等学校生であり、それ以降も本校で育った姫路南高等学校卒業生です。

この三年間の学校生活、社会生活で何を身につけ、何と闘い、自分の何を見つけるべきなのか。それを考えて過ごしたであろうこの三年間を大切にできるとよいですね。

その意味では、卒業式を終えてなお自分の目指す道の前に存在する壁をぶち破る挑戦を続けましょう。

国公立大学受験も、一昨日の前期試験が最終ではありません。周りのお祭り騒ぎに惑わされて、歩みを止めることがないように、本年度あと二週間弱の「挑戦」を準備し続けておきましょう。

「果報は寝て待て」

に非ず。

「果報は次の準備をして待て」

です。

しっかり闘い切って下さい

今日、私が皆さんに贈る

餞（はなむけ）

の言葉です。

なお、皆さんの学校への登校は本日を以てお客様となります。

明日より、私服であろうが、髪の色を染めようが、至る所にピアスをしようが自由です。

ただし、制服を着用して登校するならば、下級生への手本は保って下さい。前述の身なりで制服着用してきた場合は、これは、皆さんの「権利」の前に姫路南高等学校七十四回生としての「責任」が優先されます。

指導はしませんが、在校生の目に触れる前に退校はしてもらいます。承知おき下さい。

中期・後期に向けての指導を受ける生徒の皆さんはもうしばらく高校生を全うして下さい。

卒業式にあたり

前号でもお伝えしましたが、先日の卒業式予行、皆勤賞・ユーカリ賞の表彰、同窓会入会式（卒業生全員の参加ではありましたが、今年度より卒業生全員が入会したわけではありません）等での受賞者や、学年代表者の紹介を、改めてさせて頂きます。

クラス代表者

１組　佐野　翔　野村　叶愛
２組　宮本騎美生　柴原　綺良
３組　柴田幸太郎　延　和奏
４組　増田　佳帆　小笠原煌大
５組　岸本　実久　樽榮　結愛

代表幹事　柴田幸太郎

卒業式関係

卒業証書授与（総代）　釜増　莉緒
卒業生答辞　佐田　埜衣

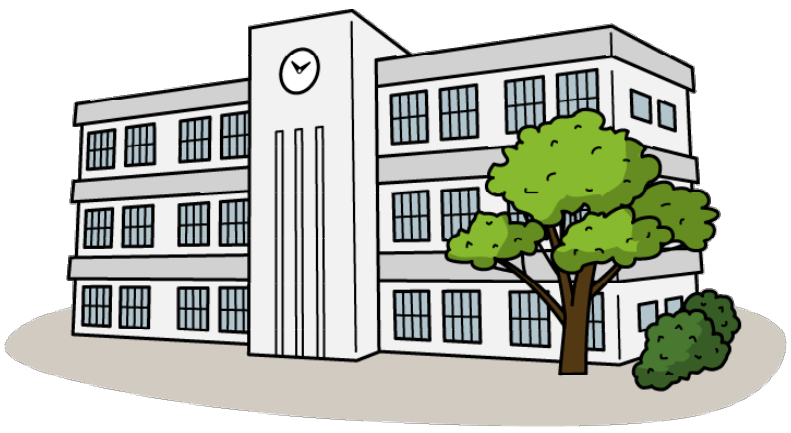
記念品関係

記念品贈呈（学校へ）　大力　優愛
記念品受領（ＰＴＡ）　花井　柊仁
記念品受領（同窓会）　飯田瑠音乃

皆勤賞

日坂　美咲（１組）　藤本　大翔（１組）
堀江　春花（１組）　松本　彩沙（１組）
竹中　愛結（２組）　藤原夕里那（２組）
宮本騎美生（２組）　奥　梓水（３組）
橘田　愛未（３組）　蔵本　悠（３組）
小林　洋晴（３組）　柴田幸太郎（３組）
藤力　結美（３組）　中谷　遥陽（３組）
前山　巧（３組）　吉田　裕亮（３組）
宇圓田愛実（４組）　田中　葵（４組）
田中　夢彩（４組）　鳴海亜希奈（４組）
西元　美希（４組）　山本　采奈（４組）
井村　愛望（５組）　岸本　実久（５組）
上月　景介（５組）

計二十五名



ユーカリ賞

箏曲部

石田　歩楓（２組）　福井　彩香（２組）
安政　里奈（３組）　釜増　莉緒（４組）

コーラス部

藤原夕里那（２組）　南　穂花（２組）
鎌田　遊（３組）　小野　夏碧（４組）

個人

保田　果凛（５組）

空手道部

船田　勇志（１組）　梶原つかさ（２組）
中田安佳音（２組）　宮原　葵（２組）
田中　葵（４組）　富井　心美（４組）
中水　龍也（４組）

バレーボール部

奥　梓水（３組）　藤力　結美（３組）
大橋　萌花（５組）　村上　里緒（５組）

陸上競技部

日坂　美咲（１組）

計二十一名

七十四回生から学校へ

卒業式（生徒には予行でお披露目となりますが）で七十四回生が歩くことになる、赤絨毯３本と保管のためのカバーを贈呈させて頂きました。

ここまでの入試状況 近隣校の情報も含めて

総合型選抜入試

・学力テストあり（主に私学）の場合

基礎学力の習熟を徹底すれば十分に闘えます。ただし、合格すればそこに進学しなければならぬ。ごくたまに併願もあるが、そこが落とし所として適切かどうかということは疑問です。

・学力テストなし（主に国公立大学）の場合

普通の真面目な生徒、評定がよい生徒でも合格のチャンスはないに等しい。チャンスがあるのは何か全国・近畿規模の表彰歴、活躍、活動がある生徒で、かつ、自己アピール力が強い、受験学部学科に関してマニアックと呼べるような生徒にはチャンスが訪れる入試パターンのようです。学力をつける時期に、入試のための提出物準備に割かれる時間を考えると、結果がチャンスのある入試機会には見えません。

学校推薦型選抜入試

・学力テストありの場合

本校であれば、授業の予習・復習」を、普通に継続してやり続けておくこと、週末課題を「提出」のためではなく、「答え合わせ」を大切にすることができれば、皆さんが「押さえ」の大学であるという認識に見合う大学であれば、可能性は十分に高いです。

「復習が当たり前」
「答え合わせができる」

学習の仕方が継続できれば、です。

・（主に国公立大学）共通テストなしの場合

学力、その分野の小論文等のテストがある場合はそれができてからの話で、面接で深掘りしてもらえるのは、その出来に大きく左右されるようだ。残念ながら不合格者の面接は、準備したのに拍子抜けの面接が多かったようである。

・（主に国公立大学）共通テストありの場合

以前は、共通テスト後のデータにおいて、個別試験と併せてCまたはCに近いD判定でも合格のチャンスがあったが、昨今は、一般試験でも合格するべき成績を共通テストで得た受験生は合格を頂いて、それ以外ではその年の倍率の妙で、部活動の結果等で県大会・近畿大会・全国大会レベルの成果がある受験生はチャンスはあるが、一般生が少し背伸びをした推薦での挑戦には、チャンスはあまりない結果がほとんどである。

この受験型においては、「行きたい大学」への挑戦というよりも、「行ける大学」への「保険」的な受験型のように結果からは窺える。

どうぞ皆さん、皆さんに囁かれる「多くの機会」は、ごく普通の皆さんにとっては「チャンス」ではなく、ただの「受験回数」が増える、つまり、「受験費用」が増す、「あの大学を受験したんだ」という、他人向けのステータスを上げるためのツールにはなるかもしれないが、自分の可能性を「高める」よりも、自分を高める時間を「奪われる」機会であると思います。

当事者はそれを「認める」ことはできないもの。「自分はそこには該当しない」と考えたいものではあるけれども、「結果」が物語っているものを、どのタイミングで受け入れる、自分に見合った挑戦法を見つけることができるか。

冷静に後輩達に引き継いでいってほしいものです。

最後の今月の・・・・の勧め

一　年

五　月　「無駄」
六　月　「諦めない」
七　月　「捨てる」
一学期末　「チャレンジ」
九　月　「さかのぼる」
十　月　「テレビ」
十一月　「大空間」
十二月　「無」
二学期末　「こだわり」
一　月　「信念」
二　月　「探る」
三　月　「自制する」
一年最終　「勇気を探す」

二　年

四　月　「悩むこと」
四　月　2　「本気でぶつかること」
五　月　「この世界の片隅を大切に」
六　月　「主体性」
七　月　「客観性」
一学期末　「ルーティーン」
九　月　「スマホとの向き合い方」
十　月　「詩に触れる」
十一月　「破壊する」
十二月　「想いを再生する」
2学期末　「夢を目に触れるようにする」
一　月　「アナログ」
二　月　「きっかけ」
三　月　「一度諦める」
二年最終　「失敗の感情で終わらない」

三　年

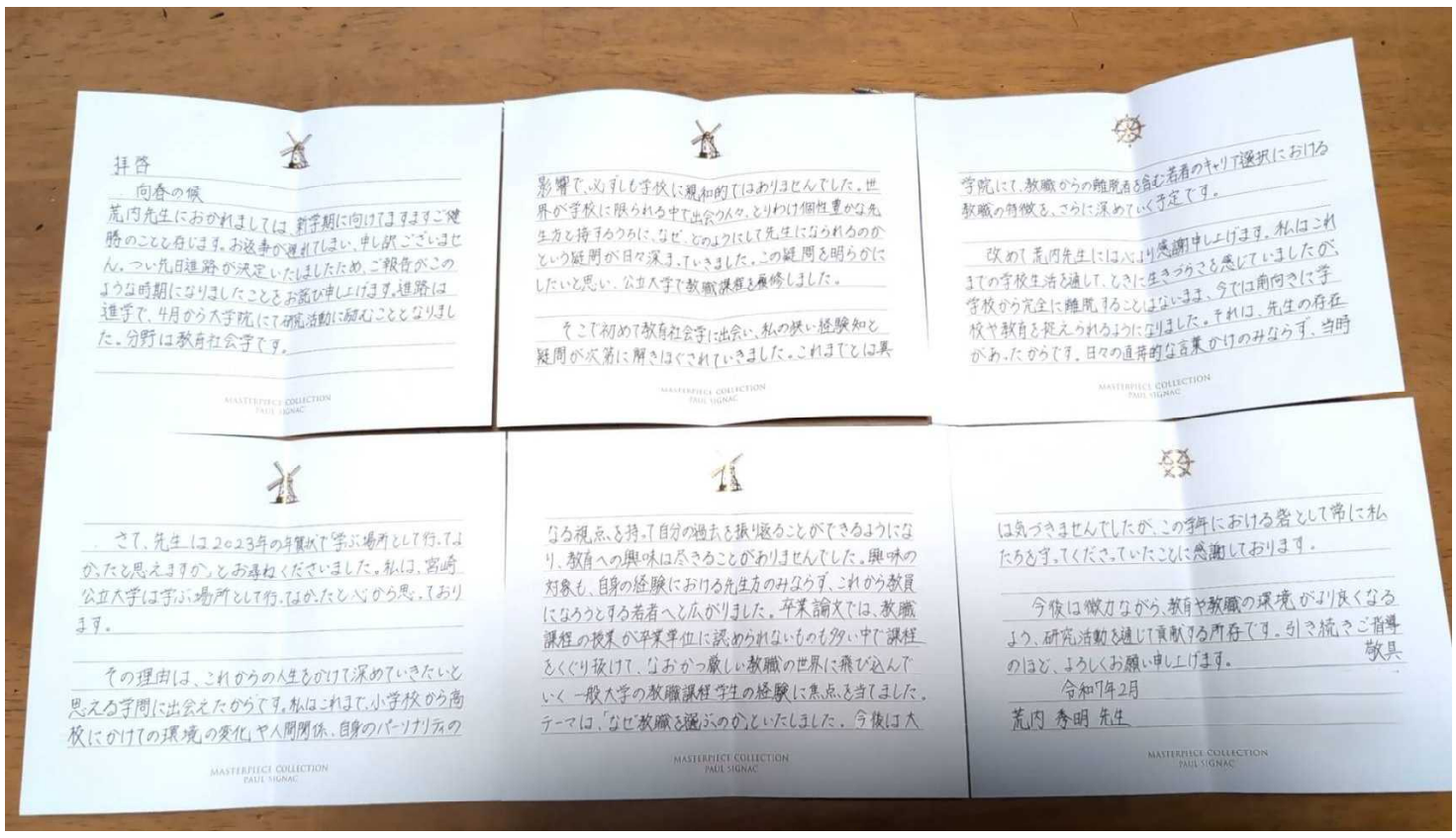
四　月　「思うだけじゃ駄目」
五　月　「目先の失敗に気付く」
六　月　「いつか報われる」
七　月　「いつもと違う努力」
一学期末　「してやりたい」
九　月　ごめんなさい
十　月　「プリテンド　pretend」
十一月　「アピール」
十二月　「自己満足」
二学期末　「景色を広げる」
一　月　「自分に鞭うつ」
一月末　「無駄な言葉を失う」
卒　業　「自分を疑う」

自分の目指すもの
自分の得たもの
自分の今
自分はこんなものではない
自分に期待する
自分の「いま」がベストであることを疑う

後悔のない「自分」のために、常に自分の「立ち位置」を疑うことができる、「自分磨き」を忘れずに生活すること。

成長したい自分がないなんて、つまらないやん！

餞（はなむけ）2



拝啓

向春の候

荒内先生におかれましては、新学期に向けてますますご健勝のことと存じます。お返事が遅れてしまい、申し訳ございません。つい先日進路が決定いたしましたため、ご報告がこのような時期になりましたことをお詫び申し上げます。進路は進学で、4月から大学院にて研究活動に励むこととなりました。分野は教育社会学です。

影響で、必ずしも学校に親和的ではありませんでした。世界が学校に限られる中で出会う人々、とりわけ個性豊かな先生方と接するうちに、なぜ、どのようにして先生になられるのかという疑問が日々深まっていきました。この疑問を明らかにしたいと思い、公立大学で教職課程を履修しました。

そこで初めて教育社会学に出会い、私の狭い経験知と疑問が次第に解きほぐされていきました。これまでとは異

学院にて、教職からの離脱者を含む若者のキャリア選択における教職の役割を、さらに深めていく予定です。

改めて荒内先生にはいつも感謝申し上げます。私はこれまでの学校生活を通して、ときに生きづらさを感じていましたが、学校から完全に離脱することはないまま、今では前向きに学校や教育を捉えられるようになりました。それは、先生の存在があったからです。日々の直接的な言葉かけのみならず、当時

さて、先生は2023年の年賀状で「学ぶ場所として行ってよかったと思えますか」とお尋ねくださいました。私は、宮崎公立大学は学ぶ場所として行ってよかったと心から思っております。

その理由は、これからの人生をかけて深めていきたいと思える学問に出会えたからです。私はこれまで、小学校から高校にかけての環境の変化や人間関係、自身のパーソナリティの

なる視点を持って自分の過去を振り返ることができるようになり、教育への興味は尽きることがありませんでした。興味の対象も、自身の経験における先生方のみならず、これから教員になろうとする若者へと広がりました。卒業論文では、教職課程の授業が卒業単位に認められないものも多い中で課程をくぐり抜け、なおかつ厳しい教職の世界に飛び込んでいく一般大学の教職課程学生の経験に焦点を当てました。テーマは「なぜ教職を選ぶのか」といたしました。今後は大

は気づきませんでしたが、この学年における器として常に私たちを守ってくださっていたことに感謝しております。

今後は微力ながら、教育や教職の環境がより良くなるよう、研究活動を通じて貢献する所存です。引き続きご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

敬具

令和7年2月

荒内 秀明 先生

MASTERPIECE COLLECTION PAUL SIGNAC

最後の自慢

皆さんが自由登校になるのと時期を同じくして、卒業生から嬉しい便りが届きました。

彼女は起立性調節障害を持つと、中学校と情報を共有することから高校生活がスタートしました。

遅刻をしてしまうことはありましたが、何とか学校を休まず通学していました。が如何せんほぼすべての授業で、開始後数分もすれば「夢の国」に(本人は決してそんな世界にいる感覚はなかったと思います)へと導かれ、教師側も彼女の状況を理解していながらも、様々な葛藤と闘い指導を粘り強く持続していく必要があった生徒でした。

教師以上に本人が、日々葛藤していたと思います。ただ自分からは逃げなかった。

印象深いのは、ある指導後に本人に「オフレコで言葉も選ばず自分の思うことを話し切ってごらん」と言った時のことです。

言いたいことを思うままに話しているようでも、言葉を選びつつ面と向かって話をしました。話しているうち、膨大な感情を言葉で穏やかに表現し続ける分、涙、鼻水で制服やカーディガンがベトベトになり、ティッシュペーパーが巨大なボールとなるほど、自分を必死で出し切ってくれた瞬間だったのかもしれません。

いま思えば、自分自身を乗り越えた瞬間だったのでしょう。

彼女は英語検定準一級を取得しました。そして、共通テストの得点、自らの英語力の可能性を信じて宮崎公立大学に挑戦し、合格しました。

学力もさることながら、一人住まいも含めた不安とも闘ったと思いますが、「覚悟」「決意」に諸方面から多くの支援・応援を頂き、いまに至ったのではないかと思います。

「経験」が最大の治療薬だったかもしれないし、振り返れば自らも記述しているように親和的でない自分が「病気」にしてしまっていた、心の「問題」があったのかもしれません。

瞬間瞬間での「問題」に、時間を経て「解決」を探るビームを当てることによって、自分の「心」の成長を遂げていく。

ともに悩み、ともに闘い、そのための時間を共有し、いま通じ合うことができる。

そんな、生徒達からの「お返し」を感じることができていることを、七十四回生と過ごす時間の最後に味あわせてもらえたことを、教育に携わる一人として感謝するばかりです。

いよいよ「新破天荒」もお別れの時です。すべての皆さんの進む「道」が、後悔がない道となりますように。

間違っても、「まっすぐ」な道ばかりを望まず、道を「途切れさせる」ことのないように。

前に「進む」ことも、「立ち止まる」ことも、後ろに「下がって」景色を拡げることも、大切にして下さい。

人が決める

無　駄

の基準に振り回されるな。

無駄と思うことを楽しめ

さぁ、いよいよです。

七十四回生の皆さんへ

卒業する今日の日をおめでとう

七十四回生保護者の皆様へ

姫路南高等学校七十四回生を支えて下さった

三年間を　**感謝**　します。

有り難うございました。

改めて、皆さん

さようなら。

最後の自慢の割には字が読みずらかったので

拝啓

向春の候

荒内先生におかれましては、新学期に向けてますますご健勝のことと存じます。お返事が遅れてしまい、申し訳ございません。つい先日進路が決定いたしましたため、ご報告がこのような時期になりましたことをお詫び申し上げます。進路は進学で、4月から大学院にて研究活動に励むこととなりました。分野は教育社会学です。

MASTERPIECE COLLECTION
PAUL SIGNAC

さて、先生は2023年の年賀状で「学ぶ場所として行ってよかったと思えますか」とお尋ねくださいました。私は、宮崎公立大学は学ぶ場所として行ってよかったと心から思っております。

その理由は、これからの人生をかけて深めていきたいと思える学問に出会えたからです。私はこれまで、小学校から高校にかけての環境の変化や人間関係、自身のパーソナリティの

MASTERPIECE COLLECTION
PAUL SIGNAC

影響で、必ずしも学校に親和的ではありませんでした。世界が学校に限られる中で出会う人々、とりわけ個性豊かな先生方と接するうちに、なぜ、どのようにして先生になられるのかという疑問が日々深まっていきました。この疑問を明らかにしたいと思い、公立大学で教職課程を履修しました。

そこで初めて教育社会学に出会い、私の狭い経験知と疑問が次第に解きほぐされていきました。これまでとは異

MASTERPIECE COLLECTION
PAUL SIGNAC

なる視点を持って自分の過去を振り返ることができるようになり、教育への興味は尽きることがありませんでした。興味の対象も、自身の経験における先生方のみならず、これから教員になろうとする若者へと広がりました。卒業論文では、教職課程の授業が卒業単位に認められないものも多い中で課程をくぐり抜けて、なおかつ厳しい教職の世界に飛び込んでいく一般大学の教職課程学生の経験に焦点を当てました。テーマは、「なぜ教職を選ぶのか」といたしました。今後は大

MASTERPIECE COLLECTION
PAUL SIGNAC

学院にて、教職からの離脱者を含む若者のキャリア選択における教職の特徴を、さらに深めていく予定です。

改めて荒内先生には心より感謝申し上げます。私はこれまでの学校生活を通して、ときに生きづらさを感じていましたが、学校から完全に離脱することはないまま、今では前向きに学校や教育を捉えられるようになりました。それは、先生の存在があったからです。日々の直接的な言葉かけのみならず、当時

MASTERPIECE COLLECTION
PAUL SIGNAC

は気づきませんでしたが、この学年における砦として常に私たちを守ってくださっていたことに感謝しております。

今後は微力ながら、教育や教職の環境がより良くなるよう、研究活動を通じて貢献する所存です。引き続きご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。　敬具

令和7年2月

荒内 秀明 先生

MASTERPIECE COLLECTION
PAUL SIGNAC